

中村耕二先生とともに

伊庭 緑

中村耕二先生と初めてお会いしたのは、1995年の秋でした。1995年といえば、1月17日に阪神・淡路大震災が起き、甲南大学も多くの校舎が崩れ、16人の学生が命を落とし、甚大な被害を受けた年です。私は1992年から甲南大学で非常勤講師として英語を教えておりましたが、地震の後は後期試験も中止で教員はそれまでの授業の結果で成績を出すことになったのを覚えています。甲南大学の立ち上がりは迅速で、すぐに巨大な仮設校舎が数棟建ち並び、入学試験も行われました。大学は避難所にもなって一時は無事だった10号館に1000人もの方が避難し、学生がボランティアで大いに貢献したとかがっております。この1995年の秋に、前年度設立されたばかりの国際言語文化センターが英語の専任教員を3人、中国語の専任教員を一人募集しました。私は甲南大学の校風や学生が気に入っており、双子の子どもも翌春から小学校にあがるので子育ても少し楽になるだろうという今から思えば甘い考えで、応募しました。自信はまったくなく、どうせ書類選考で落ちるだろうと思っていたところ、面接に呼ばれました。面接もうまくいった気がせず、落ちたと思い込んでいたところ、なぜか拾っていただきました。そして採用予定者が呼ばれた際に、中村耕二先生と津田信男先生にお目にかかったのです。お二人とも私よりずっとベテランの先生方で、私はとても緊張しました。そのとき耕二先生が、“Call me Koji”と私にはほほえみかけてこられたのです。その明るい笑顔で一気に楽になったのを今でもよく覚えています。

1996年の4月に着任してからは、試行錯誤の日が続きました。それまで大学の英語教育は文学部の英語英米文学科が担っておられましたが、国際言語文化センターに移管されたのを機に、英語のカリキュラムを一新しました。学生が望めば4年生まで英語を履修できるシステムを作ったのです。英語英米文学科からも柘矢好弘先生が移籍され、福島彰利先生が期限付きで出向され、私たち新米教員を見守って下さいました。翌1997年にはポール・ロス先生が加わり、英語の教育改革を推し進めていきました。その中で中心的な役割を果たしたのが、耕二先生と津田先生でした。耕二先生は前職の神戸市立葺合高等学校では英語科で教鞭を取っておられました。葺合高等学校の英語科は先進的な取り組みが有名で、私は神戸大学の大学院時代に、授業見学に行った記憶があります。残念ながらその時は耕二先生にはお会いできませんでしたが。

教員を褒めるのに「教育熱心な」ということばがありますが、耕二先生はまさに教育熱

心な先生です。たとえば先生の教えを受けてたくさんの学生が教員免許を取得して、高等学校や中学校の英語の先生になりました。また国際機関で働く卒業生も出ました。耕二先生は面倒見がよく、やる気のある学生の才能を伸ばします。国際言語文化センターに所属する学生はいないし、ゼミもないのですが、耕二先生を慕ってくる学生は多いのです。また耕二先生は Japan Studies という英語の科目を担当しておられますが、この科目は Year-in-Japan プログラムで甲南大学にやってくる留学生と甲南大学生が共に学ぶユニークな科目で、武士道、日本文化から平和運動まで幅広い分野を扱い、留学生への指導も熱心しておられます。

耕二先生といえばイギリス好き、というのも大きな特徴です。私は音声学や音韻論に興味があり、人々の話すことばのアクセント（いわゆる訛り）が気になるのですが、耕二先生のお話しになる英語はアメリカ英語のアクセントから、いつのころからかイギリス英語のアクセントに変わりました。語彙も変わりました。たしか私が在外研究で UCL（ロンドン大学ユニバーシティカレッジ）に行った翌年、耕二先生はイギリスのリーズ大学に在外研究で滞在されたのでそのころからかと推察いたします。私もどちらかというといギリスに縁があると思いますが、耕二先生はイギリスの文化や風土、人々を愛しておられるので、それに比べると私のイギリス愛は薄いといえるでしょう。きっと耕二先生は何事にも愛情をかけられるのでしょうか。永遠の文学青年と申しましょうか。

さて話は変わりますが、“People come, people go”ということばがあります。国際言語文化センターの英語教員の間でも、福島先生が英語英米文学科にもどったあと、アナ・フォード先生が来られ、このフォード先生がカナダに帰国することになり、トーマス・マック先生が来られました。その後、シンシア・クイン先生が着任されましたが、ご家庭の事情でお辞めになり、スタン・カーク先生が来られました。そして今でも心が痛みますが、ポール・ロス先生が逝去され、吉田佳代先生が着任されました。その吉田佳代先生もご主人の故郷ドイツに発たれ、吉田桂子先生が来られました。英語特定任期教員の先生方の動きを加えるとさらにたくさんの方の出入りがあります。こうやって振り返るとこの20年余りの中でずっと人が来たり去ったりしているのです。まるで組織も新陳代謝を繰り返している生きものみたいです。そしてこのたび、国際言語文化センターの設立の時からメンバー、中村耕二先生が去ろうとしておられます。来年からは非常勤講師としていくつかの科目は担当をお願いしておりますが、先生の研究室がなくなり、教授会でもお姿が見られないとなると大変寂しく思います。ただ耕二先生はお元気でいらっしゃるので、甲南大学をリタイアされても奥様と共に人生を楽しまれ、ご活躍されることでしょう。私はいつも耕二先生から学んでおります。これからもご指導、ご鞭撻よろしくお願ひ申し上げます。